

松 山 大 学 論 集  
第 35 卷 記 念 号 抜 刷  
2 0 2 3 年 12 月 発 行

コ ロ ナ 禍 を 越 え て  
——「シトラスリボンプロジェクト」を振り返る——

甲 斐 朋 香

## 活動記録

# コロナ禍を越えて

——「シトラスリボンプロジェクト」を振り返る——

甲 斐 朋 香\*

シトラス(=柑橘)をイメージする色のもの(紐・水引・テープなど、材質は自由)で、「地域・家庭・職場(or 学校)」を意味する「3つの輪」をつくる。この「シトラスリボン」を「安心の目印」として、賛同者がそれぞれの地域の中で広め、「『ただいま』『おかえり』っていいあえるまち」を目指そうとゆるやかに呼びかける—愛媛県の市民グループ「ちょびっと19+」が提唱する「シトラスリボンプロジェクト」とは、そんな市民活動である。

本稿では、この「シトラスリボンプロジェクト」発起人のひとりとしての立場から、3年余りにわたる活動について振り返ることとしたい。なお、本稿の記述は、必ずしもグループの「公式見解」ではないことをあらかじめお断りしておく。



Citrus Ribbon  
PROJECT

図1 シトラスリボンプロジェクトのロゴ

---

\* 「ちょびっと19+」共同代表、松山大学法学部准教授

## 1. プロジェクトの端緒

### ■ コロナ関連差別が直接の契機に

プロジェクトが始まったきっかけはコロナ関連差別だったといえる。

2020年春頃、コロナ禍発生当初の段階においては、愛媛県内における感染者数は、一桁～二桁台前半に抑えられていた。一方では、感染者の数が限られていたが故に、個人情報が特定されやすく、誹謗中傷や差別・排除にもつながりやすいという問題が起こっていた。当時は連日、新規感染者の数と属性、行動履歴が行政機関によって公表され、その情報を地元メディアが大きく取り上げ、さらには尾鰭がついてネット空間で拡散される、という現象が見られた。これは、特に感染者数が少数にとどまっていた地方では珍しくないことだったと言えよう。

行政やマスメディアのこうした情報発信には、感染ルートの特定による感染拡大阻止や「正確・迅速な情報提供」による不安感の軽減といった狙いがあった半面、感染者本人およびその家族、所属機関などに対する誹謗中傷や差別・排除といった「コロナ対策禍」<sup>1)</sup>をもたらすことにもなった。さらには、初めての「緊急事態宣言」やマスク・消毒用アルコールなどの物資不足といった混乱と不安が拡がる中で、感染者や濃厚接触者に加え、感染のリスクが高いとされる医療従事者やエッセンシャルワーカーに対する差別も顕在化しつつあった。

地域の大学人として、それ以前にいち生活人として、何か出来ることはないだろうか―「シトラスリボンプロジェクト」の端緒となったのは、そんな個人的な思いであった。

感染症の拡大阻止のためにも、誰もが周囲の目を恐れずに検査を受けられる環境が重要である。また、当時、感染者が確認された地域に対する「風評被害」もあったが、いずれ感染が各地で拡大すれば、感染者の有無自体よりも「その

---

1) 金井利之『コロナ対策禍の国と自治体－災害行政の迷走と閉塞』ちくま新書、2021年。

後」の対応がその地域のイメージを左右することになると思われた。差別や偏見による地域社会の分断は将来にも禍根を残し、対外的なイメージにも影響しかねない。

世間にはコロナ関連の誹謗中傷や差別に心を痛める者も多いはずである（実際、ネット空間での「炎上」に関わっているのは実はごく「少数派」だと言われる）。そうした「サイレント・マジョリティ」の気持ちをカタチにした「安心の目印」を各地域に増やしていけたら、差別に怯える人々も元の居場所に戻りやすくなるのではないか—というのが、プロジェクトのもととなった発想であった。

しかしそれ以上は案を具体的に詰めることが出来ないまま、筆者が愛媛大学社会連携推進機構教授の前田眞等に相談を持ちかけたのは3月下旬のことだった。

長年にわたり、愛媛県内各地でまちづくりの中間支援に携わってきた前田は、活動に実効性を持たせるためにはチームをつくる必要があること、感染者・誹謗中傷の「被害者」への直接的なアプローチではなく、「地域」への働きかけを活動の主眼とすること、の2点をアドバイスとして挙げ、自ら協力を申し出た。それからわずか一兩日中に、計6名（現在は9名）のメンバーを集めることができた。

メンバーは後述するように職種もまちまちである。自分ごととして考え、実際に手足を動かしてくれる人、地域内外に広くネットワークを持っている人、という基準で心当たりを探り、機動力を確保するために人数も絞りこんだ。

こうして市民グループ「ちょびっと19+」が発足した。メンバーは、全員が初めから旧知の仲だったわけではない。しかし、それぞれに地域や市民社会の課題に関心を寄せ、活動してきた経験を持つことから、コロナ関連差別や排除の問題に関しては、ほぼ共通した問題意識を持っていた。このため、初めから闊達に意見交換しながら、わずか60分ほどの短い時間にプロジェクトの骨格を固めていくことができた。

## ■「共創」によるコンセプト

「シトラスリボンプロジェクト」の骨格は、「共創」によって固まっていった。

実際のコンセプトは、筆者が最初ひとりで温めていた構想（妄想?）とは、少なからず隔たりがある。その違いを一言で述べるとすれば、前者は「イソップ物語」の「北風型」、後者は「太陽型」を指向するものだった、と言えようか。

実は筆者は当初、「安心の目印」の普及という「モノ申さない」手法<sup>2)</sup>に加えて、メディアや行政などに対して「モノ申す」方策をも模索していた。地元新聞社や県内自治体の各種審議会などにも参画した経験やつながりを活かして、差別や排除に傾きがちな空気を変えられるよう、報道の在り方や行政のコロナ関連施策に関して何らかのかたちで提言が出来ないだろうか、と考えていたのである。たとえば広告欄を一行分だけ「ジャック」して、差別や偏見による「被害者」に対し、俳句などの「ことばの力」をも借りて小さな応援メッセージを送り続けられないか—といった案もそのひとつである。この稚拙なアイディアの根底には、新聞記事本体が結果的に差別や偏見の助長につながっていた当時の状況に対し、「読者」の側から柔らかなアンチテーゼを示すという狙いもあった<sup>3)</sup>。

しかし結局、こうした案は、活動資金の目途も立たない段階ではひとまず「お蔵入り」として、まずは実行可能・持続可能な「安心の目印」の普及活動に注力することにした。

「安心の目印」を「リボン」にし、賛同者各自で作製・拡散してもらおう、というアイディアは、本田美紀の提案によるものである。日本においては、乳

---

2) 「コロナ差別防ぐ“心のワクチン” 愛媛発『物申さないリボン運動』 取り組み拡大に代表の思いは? 『“ただいま、おかえり”と言えるよう!』『丹波新聞』2020年8月28日付 (<https://tanba.jp/2020/08/感染者差別に「物申さないリボン運動」>)

3) 「新聞広告欄をジャックする」というアイディアは、結果的には、地元新聞社による企画広告特集の一環として実現した。「(広告特集) 差別のない社会を目指して 『シトラスリボンプロジェクト』 愛媛発 運動広がる」『愛媛新聞』2020年5月22日付

がん対策の推進に関わる「ピンクリボン」や、摂食障害に関する理解の促進を謳う「マゼンタリボン」（同じく愛媛発祥の活動である）など、各種の「リボン運動」が展開されており、一定程度の馴染みもある。また、何らかのアイテムを、「事務局」で一元的に制作・配布・販売するのではなく、賛同者がめいめい手近な材料で作製・普及していくという方法によって、「事務局」の負担は格段に軽減されることになった。さらには、リボンを結ぶという手作業が、「ステイホーム」が推奨されていた当時の世情にもマッチするのみならず、プロジェクトをより「自分事」として捉える契機にもなり得るという期待もあった。

リボンの色は、他の「リボン運動」との重複を避けた結果、黄緑色－シトラスグリーン－に決まり、次いで、愛媛の特産品でもある柑橘類の総称「シトラス」の語を冠したリボンの名称が決まった。リボンのかたちについても「敢えて『ひと手間』かけて、ゆっくり広めていきたい」「かたちに意味を持たせたい」などの意見を受け、活動を広げたい「場」、誰もが安心できる居場所であってほしい「場」ということで、3つの輪で「地域・家庭・学校（or 職場）」を表現することにした。リボンのかたち<sup>あげまき</sup>に意味を持たせる代わりに、色については柔軟に対応することに。「総角結び」「花結び」「叶結び」などと呼ばれる伝統的な結び方を採用することで、同じく愛媛の伝統産業である「伊予水引」との親和性も高まり、「地域発」のプロジェクトとしてよりふさわしいものとなった。手を動かしながら「おうち時間」を過ごしてもらうことで、達成感を味わったり、会話の糸口が生まれたりするとの期待もあった。

キャッチコピーもまた「共創」によって磨かれていった。コロナ感染者などへの誹謗中傷や差別・偏見に歯止めをかけるという当初の目的から視野を拡張し、コロナ禍収束後の社会の在り方をも見据えて、より普遍性のある、ポジティブなことばを話し合って選んだ。

当初の案は「『おかえり』っていえるまちに」。しかし、やのひろみが、これでは自分自身はいつも『迎える側』であることが前提となってしまう、と発言。

その意見を容れて、「『ただいま』『おかえり』といいあえるまちに」と修正した。これによって、双方向性のある、より「自分事」として感じられるキャッチコピーとなった。

このように、活動の骨格を固め、表現方法をさぐる作業は、同時に、自らが固定観念にとらわれていたり、様々なことを看過したりしていたことに気付く過程でもあった。

ちなみに、市民グループの名称「ちょびっと19+」は、当初「仮称」に過ぎなかったが、結局、プロジェクトの名称が決まったのちも残された。プロジェクトの立ち上げに際して短期間でやらねばならないことが多く、グループの名称についてまで再議する余裕もなかったからである。ただ、周知したいのはプロジェクト名であるため、新設したSNS「シトラスリボン from エヒメ」HPでは「Citrus Ribbon from ehime」の名義を用いた。共同代表の肩書を明記する必要があるときには、各依頼元が適宜分かりやすいものを選ぶという少々紛らわしい状況である。他方では、このグループ名には若干のおかしみと親しみやすさもあり、「特に大仰なことをしているわけではない」というメンバーたちの姿勢も伝わりやすいという利点もあったように思う。このグループ名は甲斐の発案による。いうまでもなくCOVID-19をもじったものである。

## ■ マスメディアと SNS による情報の拡散

活動の骨子が固まれば、次はPRである。緊急事態宣言下とあって、大勢の人を集めてイベントを開き、啓発活動を展開することは出来ない。このため、地元の記者クラブに情報提供・取材依頼をした上で、筆者の職場である松山大学の一室を借りて、2020年4月15日に「キックオフミーティング」を開くことにした。

そのニュースがまず地元のテレビや新聞に、次いで全国局・紙に取り上げられたことで、県内外から協力の申出や問合せが相次ぐようになった。

会合・集会も移動も制限される中、プロジェクトが我々の予測をはるかに超



写真1 キックオフミーティングの様相

提供：「ちょびっと19+」

えて県内外へ広がったのは、マスメディアと SNS の力による部分が非常に大きい。加えて、地元の個人や企業から、リボンの結び方解説動画やチラシ、ポスター、ホームページといった情報発信のツールの無償提供を受けたことも、活動の拡がりに大きく役立った。

「シトラスリボンプロジェクト」が初めて全国的に紹介されたのは、「キックオフミーティング」から2週間足らずのことであった。都道府県を跨いでの移動が厳しく制限されていたため、東京のTV局スタッフが現地取材する代わりに、静止画・動画データを「ちょびっと19+」のメンバーで作成・編集したものが番組にて用いられた。

「ただいま」「おかえり」というキャッチコピーに賛同し、従業員のヘルメットに手製のステッカーを貼るなどしてプロジェクトへの賛意をいち早く表明した松前町の建設業者。伝統工産業である「伊予水引」のシトラスリボンを結ぶ四国中央市の女性職人。営業自粛下で販売を始めたテイクアウト弁当にリボンをあしらうビストロの女性シェフ―活動発足からわずか10日ほどの間に、印象的ないくつかの事例を紹介出来るだけの態勢が既に整っていたのは、発起人メンバーのネットワークと、プロジェクトに賛意を示してくれた「共感者」

たちの「共感力」によるところが大きかったと思われる。

番組が放映されたのは日曜日 23 時過ぎ、わずか 3 分ほどの短い紹介であったにもかかわらず、その直後からプロジェクトに関する問合せや協力の申出が続々と入ってきた。そのうち、賛同企業・団体などの活動が県内外のメディアで取り上げられるようになり、さらに問合せや取材依頼が舞い込む、というサイクルが、特に最初の 1 年間は途切れることなく続いた。活動開始からわずかに約半年の間に、愛媛県内の新聞に掲載されたプロジェクト関連の記事は約 30 件、県外紙・局や専門紙による web 記事やニュース動画（2020 年 9 月 23 日までの期間に、取材依頼や掲載媒体の送付・告知、ネット検索によって確認できたものだけで）は約 20 件にもものぼる（表 1）。

表 1 シトラスリボンプロジェクト関連記事リスト（2020 年 4 月～9 月）

「コロナ差別に歯止めを 松山大准教授らグループ発足」	『愛媛新聞』2020年4月16日付
「感染者守る三つの輪 シトラスリボン 中傷・差別NO」	『読売新聞』2020年4月22日付
「コロナと憲法 愛媛から考える③ 差別と風評 過剰な恐怖心 人権侵害」	『愛媛新聞』2020年5月5日付
「コロナ差別反対 松山から シトラスリボン 県内で賛同の輪」	『愛媛新聞』2020年5月10日付
「(気流) 娘のレストラン 温情に支えられ」	『読売新聞』2020年5月13日付
「(四国人) 感染者へ温かい心を シトラスリボン運動呼びかけ人 甲斐朋香さん」	『毎日新聞』2020年5月14日付
「学校に消毒液容器を 松山JCが回収事業開始 霧吹きタイプ1,500本目標」	『愛媛新聞』2020年5月16日付
「(コロナに克つ) 水引で三つ輪リボン 四国中央でシトラス運動」	『読売新聞』2020年5月17日付
「感染者・医療従事者差別解消へ 水引でシトラスリボン 小中生ユニットが動画 結び方わかりやすく解説」	『愛媛新聞』2020年5月19日付
「コロナ差別反対 市職員もPR シトラスリボン運動 伊予市が参加」	『愛媛新聞』2020年5月21日付
「(広告特集) 差別のない社会を目指して 『シトラスリボンプロジェクト』愛媛発 運動広がる」	『愛媛新聞』2020年5月22日付
「(ウェーブ愛媛) シトラスリボン地域をつなぐ 感染者への差別なくそう 市民が発案、賛同企業も」	『日本経済新聞』2020年5月27日付

「コロナ差別解消運動 西条の成龍酒造 応援商品を販売 酒瓶に水引リボン」	『愛媛新聞』2020年6月4日付
「(スマイル!ピント) シトラスリボン 味方のしるし えひめ発!	
コロナ差別のないまちに 東温・重信中『思い広がれ』発信へ取り組み」	『ジュニアえひめ新聞』2020年6月7日付
「水引で差別解消訴え 四国中央 組合がシトラスリボン制作	
ストラップ・ピンバッジ 市職員ら着用し後押し」	『愛媛新聞』2020年6月9日付
「シトラスリボン 広報活動にポスターを 松山の会社 市民グループに贈る」	『愛媛新聞』2020年6月14日付
「コロナ差別解消 伊予生糸で発信 西予 行政や市民 組みひも	
シトラスリボンに」	『愛媛新聞』2020年6月14日付
「(門) シトラスリボンに感謝込め」	『愛媛新聞』2020年6月17日付
「伊予生糸で安心の三つの輪 シトラスリボン運動 西予で講習会」	『読売新聞』2020年6月28日付
「(HOPE えひめキラキラジュニア) 村上真風羽さん(12)=四国中央市	
水引細工に夢中 動画で発信も」	『ジュニアえひめ新聞』2020年7月5日付
「水引でシトラスリボン 四国中央 障害者や家族製作」	『愛媛新聞』2020年7月6日付
「コロナに立ち向かう 誰かの励ましに 全国へ広がるリボンの輪」	『毎日新聞』2020年7月25日付
「コロナ差別なくそう エコバッグで啓発を リボン付き 宇和島市に贈呈」	『愛媛新聞』2020年7月28日付
「差別解消願いダンス『シトラスリボン』活動 伊予市でコンサート」	『愛媛新聞』2020年7月29日付
「コロナ差別なくそう 大洲平野中 リボン100個 市に寄贈」	『愛媛新聞』2020年8月7日付
「シトラスリボンに理解を 鬼北 小中生に花火など贈る」	『愛媛新聞』2020年8月9日付
「新型コロナ 差別解消 水引リボン 四国中央 川之江南中生配布」	『愛媛新聞』2020年8月29日付
「コロナ差別解消 思い茂れ 松山城南高『シトラスツリー』作成」	『愛媛新聞』2020年9月9日付

こうしたメディアからの注目は、一面においては、厳しい現状の裏返しとも思われた。2020年5月、愛媛県内において、精神疾患を抱える患者の入院病棟にて新型コロナウイルスのクラスター感染が確認され、その直後、別の福祉事業所に誹謗中傷のビラが投げ込まれるという事件が起きた。この時にも、連日のように地元テレビ局からの取材に追われた。

そうした取材の際には、誹謗中傷や差別に対する強い非難のことは求められることも多々あった。もちろん、差別や誹謗中傷といった行為自体は、いかなる事情があれども決して容認できるものではない。ただ、その背景に目を向ければ、往々にして行為者自身の社会的孤立や経済的苦境など、より構造的な問題が横たわっているケースも少なくない。このため、差別や偏見の解消を願う心が更なる排除や分断を生むことのないようにと、発言を求められる際には注意を払った。

### ■プロジェクトの運営体制

ここで「ちょびっと 19+」のメンバーとそれぞれの果たした役割についても触れる。なお、公式 HP「Citrus Ribbon from ehime」においては、メンバーそれぞれが参画の経緯やプロジェクトに寄せる思いなどを綴った短文を公表している。

- ・前田眞-「ちょびっと 19+」発足につながる助言およびメンバーの人選を行った。「ちょびっと 19+」共同代表として対外的な窓口となる。本業は愛媛大学社会連携機構教授。愛媛県を中心に各地のまちづくり活動の中間支援を長年行ってきたことから、県内各地に幅広いネットワークを持つ。
- ・甲斐朋香-前田の助言に基づき「ちょびっと 19+」を結成、共同代表として対外的な窓口となる。本業は松山大学法学部准教授。
- ・柴崎あい-生涯教育・社会教育関係者のネットワークを持つ。勤務先でもある東雲女子短期大学やその付属高校の教職員・学生・生徒を巻き込みつつ、地域に軸足を置いて着実にプロジェクトを拓げてきた。中尾、松本を新メンバーに勧誘。本業は在野の地域教育実践・研究者。東温市にて福祉の拠点「おかけや」の運営にも携わる。
- ・ハタノエリ-「ことばのプロ」としてチラシや HP などで情報発信を行う際の文言チェックを担当。ロゴ使用に関する複雑な問合せ事例の対応窓口にも。

仕事仲間のデザイナーに依頼したプロジェクトのロゴは、全国各地で幅広く活用された。本業はライター、編集者。

- 本田美紀－「安心の目印」をリボンとした発案者。松山市にて義肢装具製作・販売会社を経営。女性防災士の会に所属するなど地域・社会活動にも積極的に参画し、経済界にも幅広いネットワークを持つ。
- やのひろみ－プロジェクトの当初のキャッチコピー案「おかえりっといえるまちに」に「ただいま」の一言を付け加えようと提案、より双方向性・普遍性のあることばを活動の根幹に据えることが出来た。本業はフリーパーソナリティー、イベント企画・音響会社運営。愛媛県を中心に熱烈なファンも多い。自らが出演する地元ラジオ・テレビやブログ、SNS、YouTube 動画サイト「やのひろみチャンネル」などを通じた情報発信はプロジェクトの認知度アップに大いに貢献した「広報部長」。
- 前田和栄－シトラスリボンの「制作部長」として、リボン結びのワークショップの際にはパートナーの前田真と並んで必要不可欠な存在である。前田真の活動を間近で見聞きし、自ら希望してメンバーに。前田真が幅広く行ってきた社会活動に共に参画するのは極めて例外的である。自宅にて学習塾を運営、幼児から中学生まで豊富な学習指導経験を持つ。
- 中尾治司－寄贈されたポスター 1,000 枚余りの有効活用について柴崎より相談を受けたのを契機にメンバーに。本業は学校教員。当時は愛媛県教育委員会に出勤中であつたが、一個人として、教育関係者を中心に自らポスター配布に尽力。伊予市立佐礼谷小学校校長赴任後は、学校を核として地域全体へやさしさの輪を拡げる活動を展開した。
- 松本司－東温市にて運送業を営む。かねてより行ってきた配送時の「地域の見守り活動」に強い印象を受けていた柴崎より勧誘を受けてメンバーとなった。祭をはじめとする地域活動や、猟銃免許を活かした害獣駆除、PTA 活動などにも精力的に参画。エッセンシャルワーカーとしての体験に基づくチーム内外での発言は強い説得力を持った。

プロジェクト開始から3年余りの間に、メンバー全員で会合を開いたのは、対面では1回のみ（それも懇親会がメインであった）、オンラインミーティング（毎回1～2時間で終了）もわずか5回ほどにとどまっている。日々の情報共有や意見交換はSNSを用いて行った。ただし、ロゴの使用許可になど単純で定型的な処理のみで済むメールについては、全体での情報共有もほとんど省略した。問合せフォームを通じて届くgmailのメールアドレスやパスワードはメンバー全員で共有した。しかし実際には、ほぼすべてのメール対応を共同代表2名で行うこととなった。こうしたやり方には、情報をほぼ一元的に網羅できるという利点もあった。

## 2. プロジェクトの展開

プロジェクト開始から3年余りの間に、個人および各種団体等をすべて合わせた「共感者」は2,000ほどにもなる。予想を超えてプロジェクトが広がった最大の理由は、全国の「共感者」たちの「共感力」にあらう。プロジェクトを最初に発案・提唱した「ちょびっと19+」の活動は、最盛期で一日20件から30件に及ぶ問合せや申出への返信と、地域内外のマスメディアの取材対応がメインという「受け身」のものに終始することとなった。ある段階まではSNSやHPを通じた情報発信も積極的に行っていたが、紹介すべき事例が毎日数十件ずつ増えるという事態が続くにつれ、それも非常に困難になった。

表2は筆者が関わった講演などのリストである。これらもほとんどが学校や自治体、各種団体の依頼によるものであった。年齢層も属性も異なる各地の参加者から得られた反応は、プロジェクトの在り方、伝え方を考える際のヒントとなっている。

表2 講演・シンポジウム・ワークショップなど（～2023年9月、筆者対応分のみ）

実施年月日	主催	実施形式及び内容 ※特に記載のないものは甲斐単独出席
2020. 6. 27	「伊予生糸×東京組紐里帰りものがたり」ワークショップ	対面（前田・前田和・ハタノ・やの・甲斐・山口（シルミル野村）・那須（野村シルク博物館）） ※主催事業
2020. 7. 13	東温市立西谷小学校	対面 6年生対象レクチャー・ワークショップ（Solac：絵本『起き上がりこぼし』作者・高次脳機能障害ピアサポーター） 教職員向けレクチャー（甲斐）
2020. 7. 29	「えんてらす」塩尻市北部交流センター	オンライン
2020. 8. 8	「野村夕涼み会」 シトラスリボンづくりワークショップ	対面（前田・前田和・甲斐・那須（野村シルク博物館員））
2020. 10. 2	浜松市立江西中学校	オンライン
2020. 11. 9	東温市立川内中学校	対面（前田・甲斐）
2020. 11. 22	「ワンピース」（発達障害当事者によるピアサポート団体）	対面
2020. 12. 20	愛南町立御荘中学校	対面（前田・甲斐）
2020. 12. 20	夢源会（新潟市）	オンライン（前田・甲斐）
2021. 1. 21	愛媛県立弓削高校	オンライン（前田・甲斐）
2021. 1. 26	岡山県井原市立稲倉小学校	オンライン
2021. 2. 4	松山市立清水小学校	オンライン（前田・甲斐）
2021. 2. 13	佐賀市勸興公民館	オンライン（前田・甲斐）
2021. 2. 15	西条市立小松中学校	対面（前田・甲斐）
2021. 2. 20	住民目線の会・山陰ネットワーク（福島浩彦・中央学院大学教授らによる市民グループ） 「第2回目線Lab. コロナと自治体」	オンライン 参加者は対面
2021. 3. 5	松山市立拓南中学校	対面
2021. 3. 9	古賀市立花鶴小学校	オンライン
2021. 4. 3	姫路市立姫路高等学校	オンライン（前田・甲斐）
2021. 4. 27	西条市立玉津小学校（児童向け）	オンライン（前田・甲斐）

2021. 5. 10	西条市立玉津小学校（教職員向け）	オンライン（前田・甲斐）
2021. 5. 14	愛媛県隣保館連絡協議会	対面＋一部参加者オンライン
2021. 6. 18	古賀市立花畑小学校	オンライン
2021. 7. 3	連合愛媛「2021 地域フォーラム in えひめ」 「SDG's 未来都市松山&シトラスリボン運動からいま私たちにできること」	対面（前田・本田・甲斐） 一部参加者オンライン
2021. 7. 5	大洲市立平野中学校	対面（前田和・甲斐）
2021. 7. 9	関西マスコミ倫理想談会研究会	オンラインにて前田対応
2021. 7. 10	佐久総合病院「農村医学夏期大学」	対面
2021. 8. 7	日本青年会議所フォーラム	オンライン（前田・甲斐）
2021. 8. 19	JAL「ふるさと応援隊」	オンライン
2021. 8. 24	まちの学校(NPO 法人「ワークライフコラボ」松山市における学童保育)	対面（前田和・甲斐）
2021. 8. 31	塩尻市立広丘小学校	オンライン
2021. 10. 1	日本臨床死生学会	オンライン
2021. 10. 24	「マドンナ bloom♡」（愛媛大学教育学部藤原一弘ゼミ学生有志によるグループ）	オンライン（前田・甲斐）
2021. 10. 31	伊予市立双海中学校	対面
2021. 10. 31	日本ガールスカウト	オンライン（前田）
2021. 11. 4	徳島県立城南高等学校	校内よりオンライン
2021. 11. 19	高山市・高山市協議会	対面
2021. 11. 23	久万高原町立美川中学校	対面（前田・甲斐）
2021. 11. 25	尾張旭市	オンライン（前田・甲斐）
2021. 12. 9	酒々井町	事前録画対応
2022. 3. 8	東温市立北吉井小学校	対面（前田・甲斐）
2022. 3. 15	外務省「Juntos !! 中南米対日理解促進交流プログラム」	オンライン（英語にて）
2022. 3. 18	公益社団法人全日本科学技術者協会	オンライン（前田・甲斐）
2022. 8. 19	福井市総合ボランティアセンター	オンライン（前田・甲斐）
2022. 9. 14	曹洞宗愛媛県支部青年部 「お寺にビタミン注入講座」	オンライン
2022. 10. 5	横浜市立杉田小学校	オンライン（前田・甲斐）

2022. 12. 18	AIDS 文化フォーラム in 名古屋	オンライン（前田）＋対面（甲斐）
2023. 6. 9	労働者福祉中央協議会 「2023 全国研究集会 in 愛媛：BE- YOND GENERATIONS～新しいつ ながりに向けたスタートライン」	対面＋一部参加者オンライン パネリスト（甲斐） ファシリテーターとして（やの）
2023. 6. 25	「えんてらす」（塩尻市北部交流セン ター）アニバーサリー	対面
2023. 6. 26	塩尻市立広丘小学校	対面
2023. 9. 9	シトラスリボン from 四国中央 「シトラスリボンプロジェクトしこ ちゅ～感謝祭：コロナ禍のその後～ だれもが暮らしやすい四国中央市を めざして～」	対面（前田・甲斐） パネリストとして

### ■唯一の「自主企画」－「伊予生糸×東京組紐里帰りものがたり」

2020 年 4 月下旬、テレビの全国放送後に増え始めたメールにまじって、手作業で組んだ「東京組紐」100 m を無償提供したいという申出が、東京・日本橋で 130 年余り続く老舗「龍工房」の若当主から寄せられた。プロジェクト発祥の地に因んだ「伊予生糸」と工房が考案した「蓄光糸」とを縫り合わせ、伝統工芸の技で組んだものを贈るという。続いて、組紐の材料である「伊予生糸」を入手するために、かねてより親交のあった愛媛県西予市野村シルク博物館に連絡を取ったところ、伊予生糸 1 kg を無償提供してもらえることになったとの連絡も入った。

「伊予生糸」＝「野村シルク」は、英国の故・エリザベス女王の戴冠式や伊勢神宮の式年遷宮などにも用いられた世界最高級品だという。地域を越えた「善意のリレー」によって、東京へ届けられた貴重な絹糸が伝統工芸の技で美しい組紐となり、糸の産地へ「里帰り」を果たす－そんな「ものがたり」を地元住民の皆さんとも共有したいと企画・実施したのが、標題にもあるイベントであった。

一過性のものに終わらない、後々まで地域の記憶に残る企画にしたい、また、地域の誇りと様々な人に対するやさしさの息づくまちづくりが進むきっかけにもなりたいたと、企画の段階から、野村にて「シルミル野村」や「おかえり食堂」

など地域密着型の企画を展開していた山口聡子、西予市職員として野村シルク博物館に勤務していた那須重昭を「サポートメンバー」に迎え、協力を仰いだ。そうして、2020年6月13日に西予市長らもまじえての組紐の「開封式」を、同27日には、組紐の活用方法を考え、組紐でシトラスリボンを結ぶ「ワークショップ」を、野村シルク博物館にて開催した。さらには、同年8月8日、乙亥会館（2017年の西日本豪雨災害による浸水被害から復旧した、地域のシンボルである）前の広場にて開催された「夕涼み会」においても、那須ら博物館の協力を得て、組紐でシトラスリボンを結ぶワークショップを実施した。同年11月に実施された県立野村高等学校の文化祭においても、生徒たちがシルク博物館の協力を得て組紐を制作し、コロナ禍の中でもやさしさを持ち続けようとPRしたという。

「絹糸」「組紐」-「糸へん」で結ばれた「御縁」はさらに、同じく絹の産地である長野県岡谷市へと繋がった。同年9月、上記の「ものがたり」を知った職



写真2 西予市野村シルク博物館にて開かれた「開封式」

参加者全員で、大きな「シトラスリボン」をかたちづくった。この後も、野村在住の「サポートメンバー」の力を借りつつ、寄贈された組紐を活用したワークショップが実施された。

写真提供：「ちょびっと19+」

員が、岡谷市蚕糸博物館より絹糸を入手，休み時間などを利用して手芸用の器具で縫り合わせて紐をつくり，プロジェクトに賛同する市民に無償で提供し始めたのである<sup>4)</sup>。この取り組みを伝えるニュースは「龍工房」へも届き，職人たちを喜ばせたという。

### ■市民有志による各地の「拠点」

京都，とちぎ，さいたま，ニイガタ，岩手，山形，きりゅう，荒川，仙台，横浜，四国中央等—ゆるやかな市民グループをつくり，独自に活動を広げる「拠点」も各地に生まれた。「とちぎ」などのように，「本家」？の我々よりもはるかに精力的に活動を展開していたグループも多い（<https://www.facebook.com/search/top?q=シトラスリボン in とちぎ>）。



写真3 とちぎシトラスリボンフラッグ

栃木県では地域の市民有志が「シトラスリボンフラッグ」を作り，県内各地でリレー展示を行った。

「シトラスリボン IN とちぎ」 facebook 公式ページより  
<https://www.facebook.com/groups/586490272272300>

4) 「コロナ差別はやめよう 岡谷市がシトラスリボン普及へ」『朝日新聞デジタル』2020年9月18日付（<https://digital.asahi.com/articles/ASN9K7K1CN9JUO0B009.html>）

我々はもとより、本業の隙間を縫って活動する弱小市民グループにすぎず、全国の賛同者の活動をすべて把握し、モニタリングすることなどは不可能である。各地域のグループとの間にも「タテの関係」はつくらず、「in/from〇〇」の名称使用に際して連絡（バッティングを防ぐため）をお願いするほかは、基本的には各地域の自主性に委ねることとした。

### ■「<sup>なりわい</sup>生業」の再認識もー営利企業などへの拡がり

町内会や自治会、PTA 組織や社会福祉協議会などの非営利団体に加え、多くの営利企業からもプロジェクトに対する賛同を得た。コロナ禍で経済が停滞する中、業種や規模の大小を問わず、プロジェクトに共感し、各々の「生業」も活かして活動を展開する企業も相次いだ。苦境に喘ぎつつ「みんなで前を向く」ためのひとつのツールとして、プロジェクトに着目した企業も多かったようである。

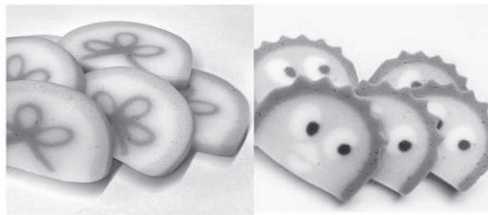
従業員のリボン着用や事業所・店舗などでの掲示に加え、バッジやストラップなどの小物や文具、マスク、タオル、ネイルシール等々、ロゴを付した商品も数多く制作・販売され、自治体や医療関係者、エッセンシャルワーカー、学校などへも無償提供された。

当初、メンバー間においては、ロゴの営利目的の使用についてはやや消極的な見方もあった。しかし、ロゴの利用が巨悪の富を得る手段となる可能性は極めて低いと思われたこと、営利企業にも雇用を守るなど大切な社会的役割があることなども考慮し、「いくつかご配慮いただきたい点」（HP の「よくある質問」コーナーに記載）を明示して先方と協議し、要件を充たしていることを確認した上で、基本的には OK することにした。

多種多様な企業それぞれが有するノウハウやブランド力、ネットワークは、プロジェクトの拡がりにも大きく寄与したと思われる。愛媛県内では、プロジェクト開始後ほどなくして、ガス会社のエネロ(株)が各家庭に設置するプロパンガスのボンベに無償でロゴマークを印刷したり、愛媛トヨタ自動車やマクド

ナルドなどが店舗での PR を展開したりといったトピックが相次いで報道され、「ちょびっと 19+」のメンバーを驚かせた。

2020 年 5 月、同じく県内の印刷業者によるチラシやポスターの寄贈を相次いで受けたことも、情報発信に大きく役立った（その後も、複数の印刷業者が県内での感染拡大に際して啓発グッズを制作し、自治体や学校などへ無償提供している）。6 月には、同じく地元の IT 関連企業が公式 HP 作成および講習（メンバーが自ら HP を更新できるように）を無償で行ってくれた。「シトラスリボンプロジェクト」の語でネット検索を行えば、最初にこの公式 HP が表示されるようになっており、問合せフォームや FAQ コーナーなども設置されたことで、「共感者」たちにとっても、また「ちょびっと 19+」にとっても、大



**写真 4 アマビエかまぼこ+シトラスリボンかまぼこ**  
滋賀県長浜市の食品会社が製造した「アマビエかまぼこ」（右）と「シトラスリボンかまぼこ」（左）。これらは地元長浜市の、次いで愛媛県伊予市の給食に無償提供された。提供：カネ上(株)



**写真 5 JAL スタッフとシトラスリボン**

日本航空においては、松山空港で勤務するスタッフがリボンを作製・着用したほか、「ふるさと応援隊」による動画作成なども実施された。写真提供：日本航空(株)

変使い勝手のよいものとなっている。

四国乳業(株)のように、寄付金付きの商品を大量に生産・販売することで、より実質的なコロナ対策支援に資する企業もあった。イベントの延期・中止や飲食店の営業自粛によるダメージも大きい中、地域で活躍するタレントや、生演奏も楽しめるバーのオーナー等による楽曲（イメージソング）の制作・発表が行われる、という事例も見られた。

### ■教育現場における拡がり

筆者自身はこれまで、地域での活動を行う際には学生有志を募ることを常としてきた。しかしこのプロジェクトに関しては、学生に声をかけることは一切していない。行動制限が厳しい中、そうしたチャンスがなかなか確保できなかったことに加え、顔や実名を出してコロナ禍に関するアクションを起こすことで、バッシングを受けるなどのリスクもあり得ると考えていたせいでもある。にもかかわらず、地域内外において次世代の地域社会を担う子どもや若者たちがプロジェクトに関心を寄せ、行動してくれることは、プロジェクトのメンバーとしては大変有難いことであった。

関係者とのやりとりからはしばしば、厳しい条件の中で子どもや若者を守り、健やかに育もうとする現場の奮闘ぶりが伝わってきた。教職員やPTA関係者など「オトナ」主導による活動ばかりでなく、生徒会や各種の学内委員会、部活などといった単位で、児童・生徒が活動に取り組みたいと自ら声を上げた事例も多かった。

地域コーディネーターなどによるサポートも受けつつ、学校から地域全体を巻き込んだプロジェクトへと発展した事例も多い。愛媛県大洲市立平野中学校では、地域の高齢者の協力も得ながら無料配布用のシトラスリボンを制作・寄付する活動を続けている。かねてより人権教育に注力してきた長野県大鹿村立大鹿中学校では、シトラスリボンづくりから発展して、生徒会主導でコロナ関連差別を生まないための「10か条」宣言を考案・公表した。こうした動きは

村議会、教委、村へも波及したという<sup>5)</sup>。福岡県古賀市立花見小学校<sup>6)</sup>や岡山県井原市立稲倉小学校など、地域内外のニュースにも繰り返し取り上げられ、地域において「優しさの輪」が広がる中核となった学校もあった。

ユニークな活動としては、福岡県太宰府市立学業院中学校、愛媛県立松山中央高等学校など、放送部のコンテストのために取材（オンラインやリアルでの）・番組制作を行い、学内外に情報発信してくれたという事例や、静岡県三島南高校のように、外国語の先生方の力も借りて生徒自ら英語や中国語、ハングル、スペイン語などで、プロジェクトの紹介文をつくり、HPに掲載している事例が挙げられる。愛媛県立松山南高等学校では、蚕を飼育して愛媛県特産「伊予生糸」を縫い込んだシトラスリボンを結び、英国のエリザベス女王にプレゼントする（女王の戴冠式に「伊予生糸」が用いられたことから）というプロジェクトが、生徒有志によって企画・実施された。遊び心のある、元来の目的である「差別・偏見の

大好きな地域のために、佐礼谷小学校の  
わたしたちにできることを考えました。



佐礼谷小学校では、授業でシトラスリボンプロジェクトのことを勉強し、リボンの作り方も身に付けたので、自分たちの手で思いをこめてシトラスリボンを結びました。

いつもお世話になっている地域のみなさんへのお礼の気持ちとして、リボンをお届けします。

かばんやキーホルダー、名札などに付けて、これからも一緒に笑顔で暮らせる素敵な地域づくりを進めていきましょう。



写真6 佐礼谷小学校シトラスリボンカード  
愛媛県伊予市立佐礼谷小学校の児童が作成したシトラスリボンに添えられたメッセージカード。リボンは校区内の全240世帯に配布された。

5) 大鹿中学校の取り組みについては、永池隆「長野県同和教育副教材『あけぼの』の改訂について－大鹿中学校のまなびとともに・『私たちは誹謗中傷をしません』宣言への道のり－」東日本部落解放研究所/『明日を拓く』編集委員会編『解放研究』第33号/『明日を拓く』136号（2023年）45-72頁を参照。

6) NHK NEWS WEB「コロナ感染者への差別や中傷しないで 文科省が緊急メッセージ」2020年8月20日(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200825/k10012582731000.html> 2023年9月18日確認)など。

解消」からは若干外れたようにも見える企画であるが、生徒たちは、リボンの材料となった「伊予生糸」のみならず、その趣旨に関しても説明する英作文にもチャレンジしている。

小学生の自由研究や高校生の総合学習、大学のゼミ活動等のテーマとして取り上げられることも複数あった。たとえば松山大学においては、社会福祉の資格取得を目指す人文学部社会学科の学生チームが、プロジェクトの啓発ポスター・チラシの作成や—それらのデータは県内外の「共感者」に提供され、実際に活用されることとなった—、2020年9月の「シトラスリボンプロジェクト展」における設営サポートを行った。愛媛大学においては、教育学部の学生グループ「マドンナ bloom♡」が「愛顔をもっと広めたい！ シトラス RE・BORN アートプロジェクト」を松山市へ提案し、助成金を獲得して、「ちょびっと 19+」共同代表を招いてのオンライン講演会の企画・実施や、市内数か所の小学校へも協力を呼びかけての「シトラスリボンアート」作製・展示を行った。

## ■政治・行政とも「良縁」を？—対話と共感をベースにした新たな市民社会の構築へ

活動開始からほどなくして、愛媛県内の市町（20市町のほとんど）を中心に、自治体からの賛同も増えた。2020年5月には、伊予市役所がプロジェクトの啓発ポスター（地元印刷業者が同市へ1,300枚寄付したものである）の庁舎内での掲示や市民への配布、公式 SNS での啓発などを始めている。

当初は他地域の無名な市民グループの取り組みをわざわざ模倣するかたちではなく、地域独自のやり方を模索したいという考え方—地方自治体としては極めて妥当なものと思われる—もあり、一旦は問合せを受けた担当者から断りのメールを受け取ることもあった。しかし、プロジェクトの認知度が少しずつ上がるにつれて、「直輸入」への抵抗感も薄れていったように思われる。ロゴ使用に関わる料金や事務手続が不要であること、また、行政主導でいわば「上から目線」の「啓発」というよりも、自発性と共感によって自然に広まる「寄り

添い型」の市民発プロジェクトであることも、行政機関の「相乗り」が増えた要因であろう。

殊に秋口には12月上旬の「人権週間」を控えての問合せが増えた。2023年9月現在までに、都道府県レベルでは長野を嚆矢として、愛媛・群馬・三重・新潟・鳥取・島根・佐賀など、また市町村レベルでは京都・浜松・名古屋・大阪などの政令市を含む60超の自治体が賛意を表明し、公式HPやSNS、広報紙などへの掲載や、ご当地キャラクターとプロジェクトのロゴとのコラボデザインを用いたポスター・啓発グッズの制作、庁舎や公的施設のライトアップなどを実施している。やりとりを通じて担当者の熱意に触れ、訪れたことのないまちに親しみを感じるようになることもしばしばであった。

地方議会関係者からの問合せも少なからずあった。たとえば愛媛県内では、新居浜市議会において、2020年5月、リボンを大きくあしらった懸垂幕を議場に掲示し、議員全員がエッセンシャルワーカーに対する「スタンディングオベーション」を行っている。2020年度から2021年度にかけては、定例会に際して、議員本人や事務所関係者、議会事務局から、議会で質問をする際に用いる資料（ロゴやチラシなどのデータ）を送付してほしいという依頼も増え、対応に追われた。京都府亀岡市議会などをはじめ、「議会だより」にロゴや紹介記事を掲載したいという問合せも数多く受けた。

国の機関については2020年秋に法務省から連携の呼びかけがあり、公式HPやSNS、白書<sup>7)</sup>でのプロジェクト紹介や、全国の法務局・地方法務局における横断幕等の掲出などが実施された。

2020年秋ごろからは、選挙をにらんで、国や地方の議員や立候補者などからの賛同の申出や問合せも増えた。中には選挙公約や実績報告に「シトラスリボンプロジェクトの推進」という項目を入れたい、などという要望もあった。

---

7) 法務省・文部科学省編『人権教育・啓発白書』令和3年版114頁。また法務省編『犯罪白書』令和4年版335頁においても、愛媛県松山地区更生保護女性会によるリボン作製・地域への配布活動が「新型コロナウイルス感染症の感染拡大下における更生保護の実践例」のひとつとして紹介されている。

そうした中、2021年2月2日、我々にとっての小さな「事件」が起こった。菅義偉首相（当時）が胸にシトラスリボンをつけて国会答弁をしている姿がTVに映っている、という連絡が飛び込んできたのである。確認したところ、同日、参議院議院運営委員会において、プロジェクトに関する質疑応答も行われたことがわかった。

こうした政治関係者からのアプローチに対しては、メンバーの中には若干の戸惑いもあった。むろん、コロナ関連差別対策に対する関係者の認識の高まりは歓迎されるべきことである。また、これらのアクションは、往々にして、人にやさしい社会や政治の実現を願う有権者の思いを汲んだものでもあった。一方ではしかし、あらゆる政治団体や政治家個人とは、その政治姿勢にかかわらずフラットに一定の距離を置きたい、というのが我々の基本的な態度ではあった。

折しも、当時は緊急事態宣言の延長や東京五輪の開催などの難題が山積していたのに加え、政権・与党内部での数々の不祥事や疑惑が報道され、与野党対立が激化した時期でもあった<sup>8)</sup>。また、元来、シトラスリボンプロジェクトは、賛同者がそれぞれのやり方で「安心の目印」を身の周りに拡げていくという、個々人の思いをベースにしたものであり、政治という集団的な営為には馴染まない部分もある。オンライン会議にて今後の対応を話し合った結果、子ども向けのメッセージという体裁をとりつつ、HP上で改めて私たちの基本姿勢を明示することにした。それが2021年2月5日付の投稿記事「〇〇小学校の皆さんへ」である（<https://citrus-ribbon.com/archives/463>）。併せて、政治関係者からの申出や問合せへは、下記の文書も添えて返信することで対応した。

---

8) 議院運営委員会でプロジェクトに言及がなされた当日にも、与党議員や菅元首相自身の緊急事態宣言期間中の会食や、河井元法相夫妻の政治資金疑惑などをめぐり、野党側から厳しい質問が出されている。なお、国会においては、その後も2021年5月20日参院厚生労働委員会、2022年4月20日参議院法務委員会において、政府参考人より、コロナ関連差別防止の取り組みや、少年院在院者による社会貢献活動の事例として、（わずか一言ではあるが）プロジェクトに関する言及がなされている。

### 【政（まつりごと）に携わる方々へ】

最近では、政に携わる方々からも様々な問合せや申し出を受けるようになりました。一方ではまた、プロジェクトに対して深く理解しつつも敢えて距離を置き、見守ってくれる方々もいるようです。様々なかたちで、たった9人の市民有志によるこのささやかなプロジェクトに心を寄せて頂けていることに対し、心より感謝申し上げたいと思います。

立場や信条を問わず、公の職にある（あるいはそれを志す）方々に対して、私たちは特段の働きかけをしていません。この社会には、私たちよりも切実に政治や行政の力を必要とする人々がたくさんいるからです。共感者の方々に、それぞれ手近に出来るやり方で、優しさを表現していただく—という私たちの活動は、ひとりでも比較的手軽に参画できるもので、費用もさほどかかりません。

私たちの社会には、見知らぬ誰かの力になりたいと考え、行動を起こす市民の方々がこれほどにもいるのだと、このプロジェクトを通じて日々実感させられます。「共助」だからこそ出来ること、「公助」にこそ出来ること、それぞれに知恵や力を出し合いながら、誰もが取り残されることなくこの困難な時代を乗り切っていけるよう願っています。私たちも、少しずつ違うひとりひとりの共感をベースにした「市民発」のプロジェクトとして、これからも出来ることをほんの「ちょびっと」ずつ、やっていきます。

## 3. プロジェクトを<sup>ひもと</sup>く—若干の考察

### ■ 広がった要因

この小さなプロジェクトが急速な展開を遂げた要因を、現段階では以下のよう<sup>に</sup>捉えている。

- 敷居の低さ：プロジェクトの要諦は、手近な方法で「地域・家庭・職場また

は学校」を意味する3つの輪を表し、「安心の目印」として掲げるだけ。費用もかからず、いつでもどこでもひとりからでも手軽に始められる。差別や誹謗中傷をする人に対して正面から異論を唱える必要もなく、心理的ハードルも低くて済む。

- 「優しさ」の「見える化」：非難や誹謗中傷は目につきやすい半面、実際と同調者の数や社会全体の中の割合はかなり限定的と考えられる。一方、地震や豪雨などこれまでの災害と違って、コロナ禍においてはボランティア活動もままならず、もどかしさや無力感に悩まされる人も多かったように思われる。そうした「サイレント・マジョリティ」の心情を「見える化」し、苦境に置かれた人々への労りや励ましの気持ちを表す手立てを提供できたことで、多くの人が抱えていた「モヤモヤした気持ち」の解消につながったと考えられよう。
- つながるたのしさ、誰かの力になれる喜び：コロナ禍で苦境にあるはずの企業の関係者からも物品の寄贈を受ける機会が多くあった。そうした折に聞かれたのは「前を向いて進んでいる感覚」「誰かとつながっている感覚」が楽しい、という声であった。
- デザインの力：「キックオフミーティング」に合わせて、メンバーのひとりが急拵えでロゴをつくってくれた。そののち、地元デザイナーがご厚意で提供してくれたものが、現在のロゴである。このロゴを使用してグッズを作りたい、という問合せも非常に多く受けた。また、各地でご当地のイメージカラーや特産品を用いたりボンも数多く考案された。

## ■プロジェクトの到達点と限界

プロジェクトの「効果」を測るには、当初の目的であったコロナ関連差別の防止・解消への貢献という観点から分析を行う必要がある。しかし、こうした観点から客観的な数値を示すことは必ずしも容易ではない。ただ、当事者・関係者の声<sup>9)</sup>やプロジェクトへの賛同の実態から、コロナ感染者や医療関係者、



写真7 奥道後壺湯の守

愛媛県内において最初にコロナ軽症者・無症状患者の受け入れを表明した松山市のホテル「奥道後・壺湯の守」。療養者を温かく受け入れ、従業員を風評被害から守りたいと、いち早くプロジェクトに賛意を表明した。

エッセンシャルワーカーにとって、プロジェクトがささやかな励ましになったと結論づけることは出来るように思われる。

他方において、数波にわたる感染拡大ののちも根強かったコロナ関連差別の撲滅・根絶が叶わなかったことは、プロジェクトの「限界」とも言える。事件のたびに、賛同者・共感者の一部からは、より強い言葉や態度で「差別・偏見を絶対に許さない」という意思表示をしたり、より実効性のある「差別撲滅策」を模索したりすべきだとの声も寄せられた。しかし、マンパワーや活動資金などのリソース不足という単純な問題に加えて、当時しばしば問題視もされていた「自粛警察」のように振舞うことに対する躊躇・忌避感、プロジェクト自体が新たな「同調圧力」を生み出す可能性に対する懸念もあって、結局、当初からのゆるやかなスタンスを保ち続けることとなった。

9) 「天声人語」『朝日新聞』2021年1月4日付など。



写真8 宮崎県トラック協会の「シトラスリボントラック」

長距離移動を伴う運送業界・交通業界も、時に感染拡大の一因として差別や偏見にさらされた。宮崎県トラック協会は、フェリーターミナルの運営会社やLCC航空会社のソラシドエアとも連携して、プロジェクトのPRを陸・海・空で展開。愛媛県トラック協会もこうした動きに追随した。ふだん注目されない大型トラックに手を振る通行人もおり、仕事への誇りと責任感を新たにするドライバーもいるという。

提供：宮崎県トラック協会

## ■思わぬ効用も？－「エンパワーメント」・「もやい直し」

このプロジェクトは時に、子どもや高齢者、障害者などが自信や達成感を得たり（＝「エンパワーメント」）、「生きづらさ」を抱えて孤立しがちな人々が再び社会と接点を持ったりする小さなきっかけにもなった。障害者の就労支援事業所の中には、コロナ禍による打撃を受けたところも多く、シトラスリボングッズの作製・販売は、利用者の経済的自立の一助ともなった。体の不自由を抱える一人暮らしの高齢者などから、手作りリボンの無料配布や医療従事者・エッセンシャルワーカーへの応援メッセージカードの寄贈などを行うことで、誰かの役に立つ喜びや、つながる楽しさを実感できたという声も寄せられた。2021年5月20日参院法務委員会においても、更生のためにも地域社会貢献の機会創出をと訴える議員質問の中で、兵庫県播磨学園在院者がリボンを作製・寄贈



**写真9 北吉井小学校のシトラスリボンバッジ**（やのひろみ公式ブログより）  
 愛媛県東温市立北吉井小学校の依頼を受けて、精神障がい者の就労支援事業所「風のねこ」が制作したバッジ。同小においては、コロナ関連差別の問題が一旦沈静化したものの、人権全般を尊重するという観点からプロジェクトが推進されている。バッジ制作・販売は事業所利用者の経済的自立の一助となったのみならず、「社会から必要とされている」「地域社会とつながっている」という感覚の醸成にもつながった。  
 （2023年2月17日記事 <https://yanohiromi.com/turezure/%E6%9D%B1%E6%B8%A9%E5%B8%82%E7%AB%8B%E5%8C%97%E5%90%89%E4%BA%95%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1/>）

した事例が紹介されている。

児童や生徒の思いを丁寧に掬い上げ、地域を巻き込みながらプロジェクトを推進した学校の中には、人口減少地域に立地する超小規模校も多かった。教育関係者の中には、ともすれば気後れしてしまいがちな子どもや若者が社会とかかわり、自信をつける機会として、プロジェクトを捉える者もいたようである。その過程における様々な出会いや対話は、視野を広げ、自らの裡にもある偏見や固定観念に気付くきっかけにもなり得る一筆者自身がそうであったように。

ハンセン病問題や部落問題など、差別と長年向き合ってきた団体からも、連携協力の申出を受けた。プロジェクトがもつ一種の「軽やかさ」や「ゆるやかさ」も、裾野を広げるのに有効な方法であると一定の評価を受けたようである。

## むすびにかえて—プロジェクトの今後

ワクチンの開発・普及やウイルスの変容、繰り返し押し寄せた感染拡大の波を経て、新型コロナ感染症に対する人々の意識も、この3年余りの間に徐々に変化している。ピーク時には一日30件近くのにのぼった問合せの数も、2022年に降は落ち着いてきた。政府によるコロナ対策の変更にも伴い、プロジェクトの「共感者」の中には、今後の活動の在り方について再検討するところも出てきたようである。

「シトラスリボンプロジェクト」は初期の段階から「いつか活動が不要になること」を最終目標に掲げ、プロジェクト自体が自己目的化したり、あるいは新たな同調圧力となったりすることのないよう留意してきた。その一方では、当初からコロナ関連差別のみにフォーカスするのではなく、より長期的には、多様性を認め合える、より包摂的な地域社会となることを念頭に置いてきたという経緯もあり、コロナ禍の収束を以てプロジェクトの「賞味期限」が過ぎたと断じることには若干の違和感も残る。「ちょびっと19+」のメンバー全員で話し合った結果、当面は問合せ窓口を残しておき、活動の在り方については従来通り「共感者」に委ねることにした。プロジェクトからの「卒業宣言」も、従来通りの活動の継続も、何らかの新機軸を打ち出すことも、等しく歓迎である。

様々な立場の人を包摂する「ただいま」「おかえり」は、あらゆる差別や分断に柔らかく抗する力を持ち得る。そんなささやかな確信に基づいて、今後は、共感と自発性によってゆるやかに広がったプロジェクトの記録を収集・整理するとともに、学際的な視点や手法を援用して分析・考察を行い、次世代へと伝える作業も少しずつ進めていく予定である。